

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K11796

研究課題名(和文)「森のゾミア」論に向けた東南アジア山地狩猟採集民ムラブリに関する学際的研究

研究課題名(英文) Interdisciplinary Research on Hunter-gatherers in Upland Southeast Asia, the Mlabri, towards a Theory of "Forest Zomia"

研究代表者

二文字屋 脩 (Nimonjiya, Shu)

早稲田大学・平山郁夫記念ボランティアセンター・講師(任期付)

研究者番号：50760857

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、タイ北部で唯一の狩猟採集民と知られるムラブリを対象に、ムラブリの文化的特質について学際的なアプローチ(人類学、言語学、農学)から明らかにすることで、今日の東南アジア山地研究(ゾミア論)の学問的空白を補うとともに、「森のゾミア」論を構築することである。本研究を通して、人びとの社会性が遊動性に基礎づけられていること、ムラブリ語の諸方言が意図的な変化の結果であること、そして森での自律的な生活を可能とする十分な植物性資源の知識があることなどが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ジェームズ・C・スコットによるゾミア論は、現在でも様々なアプローチから検証が行われているが、大陸部においては主に焼畑移動耕作民を中心とする「山のゾミア」が中心的に論じられている。これに対して本研究は、(ポスト)狩猟採集民を事例に「森のゾミア」を提示し、「平地/山地」という従来の空間認識をより立体的に描き出すことで、当該地域のダイナミズムを捉えるための視点を提供し、東南アジア研究(主に大陸部)への理論的貢献に資するものである。

研究成果の概要(英文)：This study aims to compensate for studies of upland Southeast Asia (Zomia theory) and to construct a theory of "Forest Zomia" by interdisciplinary research (cultural anthropology, linguistics, Agriculture), through a case study of the Mlabri, who had been known as the only hunter-gatherers in northern Thailand. This study shows that the people's sociality is based on mobility, that the dialects are the result of deliberate changes, and that they have sufficient knowledge on plant resources to enable autonomous living in the forest, and so on.

研究分野：文化人類学

キーワード：森のゾミア 東南アジア大陸部 ムラブリ ポスト遊動狩猟採集民 タイ北部

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

従来の地域研究があまりにも近代領域国家を前提としてきたことへの反省から、オランダの学者ファン・スヘンデルは、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナムなどの東南アジア諸国、そして中国南部とインドの一部地域を含む新しい空間的枠組みを提唱し、これを「ゾミア」と呼んだ。そして政治学者で人類学者でもあるジェームズ・C・スコットは、「ゾミアの住人(山地民)」の歴史的・文化的な共通性にアナーキズムを見出し、山地民とは統治と収奪を目論む国家から積極的に距離をおいてきた「国家に抗する社会」であったとの議論を展開した。

スコットの議論は、東南アジア山地研究の新たな地平を切り開くものだったと評される。それは国家が語る「大きな物語」としての歴史に対して、人類学者や歴史学者がこれまで蓄積してきた山地民の「小さな物語」を、たくましい想像力と卓越した編集能力を通じて編纂し、国家とは真逆に位置する新たな歴史観を提示したからである。

もっとも、その主張の多くが類推的仮説の域を出ないなど、スコットの議論には批判も多い。だがスコットの議論がその魅力を未だ失わないのは、これまでの東南アジア地域研究が前提としてきた国家という分析単位を相対化し、かつ国家に対する抵抗力を備えてきたという山地民の主体性を前面に打ち出すことで、新たな山地民像を提示することに至ったからである。しかしスコットに始まる一連の議論には、大きな欠点がある。端的に言ってそれは、「ゾミア」をめぐる議論に狩猟採集民の視点が含まれていないことにある。

### 2. 研究の目的

山地民(ゾミアの住人)は、国家の統治から逃れるために独自の社会と文化を編成してきたというのがスコットの基本的な主張である。しかしそこで想定される山地民とは、焼畑移動耕作を伝統的な生業としてきた人びとであり、後続の議論もまたこれを暗黙の前提として共有している。この点において、既存のゾミア論は未だ不完全である。なぜなら民族的多様性こそがゾミアの特徴であり、狩猟採集民の存在を看過することは、「ゾミア」が提唱された本来の意図から外れるだけでなく、今日のゾミア論そのものの射程を狭めてしまうことになりかねないからである。そこで本研究では、「盆地国家/山地農耕民」という図式に基づく従来の議論に対し、東南アジア大陸部では希少な狩猟採集民ムラブリの事例研究を通じて狩猟採集民のアナーキズム論を検討し、東南アジア山地研究に対して「森のゾミア」論を構築することを目指した。

### 3. 研究の方法

本研究の基本的な研究スタイルは、スコットが扱った項目(生業様式や生活様式、政治体制、社会構造、口頭伝承など)に沿ったムラブリの事例研究である。もっとも、今日のムラブリは、政府主導の定住化政策により生業様式や生活様式を大きく変化させてきた。さらにムラブリは無文字社会であるために歴史資料が少なく、これまでの研究蓄積も決して厚いものとは言えない。そこで本研究では、参与観察と聞き取り調査を中心とする実地調査を通じてムラブリの過去の再構築を行った。そしてスコットの主張の根拠となっている項目をムラブリの事例から批判的に検討し、上記の目的を達成しようとした。

人類学を専門とする二文字屋(研究代表者)は、ムラブリの遊動生活と社会関係の関連性に注目することで、「山地民は国家的支配から逃れる戦略として、移動性の高い焼畑移動耕作を採用した」とするスコットの仮説を検証した。狩猟採集民は遊動生活を前提とし、その移動性は焼畑移動耕作よりも高い。また、高い移動性ゆえにその社会構造は平等主義的かつ柔軟性に富んだものであり、両者には密接な関連性が認められる。そこで第一世代(森生まれ森育ち)と第二世代(森生まれ村育ち)のを対象に聞き取り調査を行うことで、ムラブリにみる遊動を動機と機能的側面を明らかにしつつ、遊動生活と社会構造の関連性とその特質が、スコットのいうアナーキズムを潜在的に内包するものであるのかについて考察検討した。

農学を専門とする才田(研究分担者)は、ムラブリの森での生活環境、とくに植物性資源の採集方法と利用方法を明らかにすることで、森での経済的自律性の可能性を検証した。ムラブリは、物々交換などを通じて平地社会や他民族と何かしらの経済的関係を築いていたとの記録がある。しかし経済的関係を必要としたのがムラブリであるのか、あるいは外部社会であるのかなど、経済的関係に至る動機や背景は未だ十分に明らかにされていない。そこで年長世代を対象とした聞き取り調査から過去を再構築するとともに、森の生活経験をもつ年長世代の協力を得て、食用のみならず医療用にも用いられてきた植物性資源の分布状況、そして植物性資源の採集方法とその利用方法を生態学的・栄養学的観点から分析することで、外部社会への経済的依存を必要とせずに森での自律的生活が可能であったのかを検証した。

言語学を専門とする伊藤(連携研究者)は、ムラブリ語の方言差と語派内の特異性を、「ゾミア的動機」、すなわち「自集団と他集団の言語を戦略的に区別する」ことにあったとするスコットの仮説を検証することで、「森のゾミア」論の構築に向けた言語学的貢献を担った。ムラブリ語には3つの方言があるが、それぞれが持つ語彙は基礎的な語彙でも著しく異なっており、さらにムラブリ語はクム語派の中でも語源的説明のつかない語彙を多く持つ。そこでムラブリ語に意図的な言語変化(エソテロジェニー)を想定し、「森のゾミア」における言語変化のモデル構築を試みた。

#### 4. 研究成果

学際的アプローチを採用する本研究では、それぞれの分野で大きな成果が得られた。

人類学班では、「山地民は国家的支配から逃れる戦略として、移動性の高い焼畑移動耕作を採用した」とするスコットの仮説を検証するべく、とくに集団を単位とする遊動ではなく個人を単位とする遊動に注目し、遊動から定住への過程が不可逆的だとする定住中心主義を相対化しつつ、人々の社会性と遊動性との関連とその特徴について分析した。その結果、ムラブリの社会生活を民族誌的事例から論じ、遊動性に根ざした社会関係のあり方の特徴として、「身を引く」という態度の社会的側面とその機能が明らかとなった。加えて、他民族や外部世界との関係の歴史的変遷についてデータを収集し、経済的な相互依存関係を結ぶ外部集団を、ムラブリが時に意図的に選択し、時に偶発的な出会いから接触を持ったことを明らかにした。人口も極めて少なく、また当該地域に暮らす他民族集団に比べて比較的最近まで遊動生活を送ってきたムラブリに関する先行研究が極めて少なかったなか、様々な民族集団にとって一種のアジールとなってきたゾミア地域を論じる上で貴重な成果を上げることができたと考えている。

言語学班では、主に(1)言語学からゾミア論を読み直し、ムラブリ語の方言間に見られる諸現象をゾミア論から分析すること、そして(2)学際的な研究の中で言語を用いた研究に貢献することの二点に取り組んだ。(1)について、ゾミアの中で話される言語の中でムラブリはその変異の多さが特徴的であり、言語の方言差に顕著に表れていること、またその変異の形成に「ゾミアを生み出す力学」が見てとれることを明らかにした。ただし、差異を作り出す言語現象の例が少なく、モデル化には至らなかった。ムラブリ語に系統的に近い言語における類例は数例確認できているため、ムラブリ語以外の並行例を収集し、モデル化を進めることが今後の課題となる。(2)について、認知科学との共同研究から、ムラブリ語の比喩表現とその際立った特異性を明らかにした。これまでの研究で常識とされてきたものを覆す内容であり、学問的なインパクトが大きく、今後はより多角的で詳細な検討、および理論的な議論が必要になる。ゾミアに対する理解に直接関わるものではないにしろ、本課題の研究助成がなければなし得なかった成果である。

農学班では、森林資源の活用をムラブリ文化のひとつと位置づけ、主に(1)ムラブリに伝わる活用森林資源の整理と(2)それに関する知識と活用技術が定住世代に継承されているかに焦点を当てて調査を行った。(1)については、特定できた活用森林資源31種を食用、薬用、材料の3つに分類し、それらの活用法を整理した。薬用植物7種について確認したが、いずれも抗菌作用は確認出来なかった。課題として、精度を高めるためにより広範囲な調査を行う必要がある。(2)については、ムラブリがほぼ1世紀に渡って蓄積し継承してきた森の知恵は森生まれ森育ちの森世代から、村世代に伝えられていることが明らかになった。生活の場が森から村へ、生活スタイルが遊動狩猟採集から農耕賃金労働へと変化する中で、森の文化が継承されていることが明らかになったことは森のゾミアを考える上で貴重なデータである。

上記のように、それぞれの班は本研究を通して研究成果を上げてきた。しかし新型コロナウイルス感染拡大の影響により2020年度は現地での追加調査が実施できなかったことが影響し、それぞれの知見を統合した形で「森のゾミア」を十分に論じるには至っておらず、今後の課題として残された。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 二文字屋脩	4. 巻 10
2. 論文標題 動きを能う：ポスト狩猟採集民ムラブリにみる遊動民の身構え	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 年報人類学研究	6. 最初と最後の頁 134-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 二文字屋脩	4. 巻 19
2. 論文標題 ムラとクウォール：ポスト遊動狩猟採集民ムラブリのエスニック・アイデンティティ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 年報タイ研究	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 才田春夫、伊藤雄馬	4. 巻 12
2. 論文標題 ムラブリの智の伝承－森林資源活用について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 富山国際大学紀要	6. 最初と最後の頁 69-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ITO, Yuma and SAIDA, Haruo	4. 巻 11
2. 論文標題 A Note on Terminology for Bamboo and its Use in the Mlabri, a Hunter-gatherer Group in Thailand	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 富山国際大学紀要 現代社会学部	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 二文字屋脩	4. 巻 46
2. 論文標題 原始豊潤社会論再考:ポスト遊動狩獵採集民ムラブリにみる「豊かさ」の現代的位相」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『社会人類学年報』	6. 最初と最後の頁 93-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Wnuk Ewelina, Ito Yuma	4. 巻 32
2. 論文標題 The heart 's downward path to happiness: cross-cultural diversity in spatial metaphors of affect	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Cognitive Linguistics	6. 最初と最後の頁 195-218
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/cog-2020-0068	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 Shu Nimonjiya
2. 発表標題 "Why Do They Choose the Hmong?: A Partnership Selection among (Post-) Nomadic Hunter-Gatherers, the Mlabri, in Northern Thailand"
3. 学会等名 SEASIA Biennial Conference 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 二文字屋脩
2. 発表標題 なぜモンなのか?:歴史的・地理的状況にみる 遊動狩獵採集民ムラブリのパートナーシップ選択
3. 学会等名 第101回東南アジア学会研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 二文字屋脩
2. 発表標題 イズムなきアナキズム：ポスト遊動狩猟採集民ムラブリにみる“志向性なきアナキズム”
3. 学会等名 第53回日本文化人類学会研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shu Nimonjiya
2. 発表標題 “The Art of Dodging: Anarchism among the Mlabri in Northern Thailand”
3. 学会等名 VI International Multidisciplinary Scientific Conference Social Sciences & Arts SGEM 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ewelina WNUK, Yuma ITO
2. 発表標題 Heart-based emotion metaphors in Mlabri (Austroasiatic, Thailand)
3. 学会等名 International Cognitive Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ewelina WNUK, Yuma ITO
2. 発表標題 Emotion systems in mobile and sedentary hunter-gatherers
3. 学会等名 International Society for Research on Emotion conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ewelina WNUK, Yuma ITO
2. 発表標題 Cross-cultural diversity in spatial metaphors of emotion
3. 学会等名 International Society for Research on Emotion pre-conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuma ITO
2. 発表標題 Syllable structure in Mlabri
3. 学会等名 Southeast Asian Linguistics Society (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 二文字屋脩
2. 発表標題 ムラとグウォール：ポスト遊動狩猟採集民ムラブリの自他語りにみるエスニシティ
3. 学会等名 日本タイ学会2018年度研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shu NIMONJIYA
2. 発表標題 The Experience of Transboundary among the Mlabri
3. 学会等名 12th International Conference on Hunting and Gathering Societies (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	才田 春夫  (Saida Haruo)  (80350742)	富山国際大学・現代社会学部・教授   (33202)	
研究 分担者	伊藤 雄馬  (Ito Yuma)  (10795488)	横浜市立大学・都市社会文化研究科・客員研究員   (22701)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------